

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2007年 夏号 7月11日発行/季刊
発行人：進藤 禮治郎
連絡先：府中市日新町 4-5-24
TEL 042-366-2134

府中「田んぼの学校2007」始まる



府中「田んぼの学校」は3年目で、東京農工大学の指導と同大学の農地で始まりました。バケツ稲を育て、成長記録を取るのも前回と同じです。募集人数35人を越える41人の参加があり、人気ぶりがうかがえます。5月27日(日)に開校し、猛暑の中、田植えをしました。田植えはまさに「田んぼのお祭り」で、子ども達は大はしゃぎ。おそろおそろ田んぼのなかを歩く様子や田植え姿はほほえましいものでした。(田中 正仁)

「こりゃ大変だ」

田植えをする時、おもしろそうだと思ってはだしでやってみた。田んぼに足を入れたら、クッーと足がどンドンしずんでいった。ちょっとだけびっくしたけど、おもしろかった。足をぬく時は、たへんだった。力を入れないとぬけなくて「こりゃ大変だ」と思って力を入れたらぬけた。苗を植える時、おじさんから「深く入れるんだよ」と言われてやってみたら、ちゃんと苗がたったのでうれしかった。次の生き物観察に早く行きたいです。

(関井千織/住吉小学校5年)



ドロの中にくいっと…

わたしのすんでいる府中で田うえができました。すごくあつい日だったけれど、田んぼの土と水は、少しつめたくて、田んぼの中に足を入れると、ドロの中にくいっと入ってあるくのがたいへんで、ころびそうになったけど、がんばって田うえをやりました。名前をつけたぼうを田んぼにさしてわたしの田んぼができました。楽しかったです。こんどは、やごを見つけないですか。

(おかざき みなみ/府中第九小学校3年)

でも、楽しかった

初めての田んぼの学校では、お米を育てるため田んぼになえを植えるので、田んぼに入りました。さいしょはとでもつめたかったのですが、だんだんまあったかくなってきて、ぜんぜんだいじょうぶでした。あと何回も田んぼでころびそうになりました。いどうするときも、なえをふまないようにするのが大変でした。でも、やっぱり田植えは楽しかったです。これから、お米がどんなふうにも成長していくかとても楽しみです。

(佐々木 麻衣/明星小学校4年)



桜の悲鳴が聞こえる!

⑩

府中名物『桜通り』のソメイヨシノは毎年見事な花のトンネルを作り市民を楽しませます。しかしよく見ると、桜は周囲をブロック舗装やツリーキーパーで固められ、幹は自由を奪われ悲鳴を上げながら醜いこぶを増やし、根はキーパーを持ち上げ市民がつまずくなどの危険性もあります。市はもう少し桜を労わり、活力を与えるなど対策を考えるべきではないでしょうか。



レンゲまつり



花飾り

「あー、これ、レンゲ摘んできたんだけど、わたし今から竹とんぼづくりに行くからつくっといて」、「どうやるかも解んなーい」、「もうできなーい」、「レンゲの茎がすぐ折れちゃうよ」、「じゃ、茎のまんなかになんか縦に切れ目をいれてごらん。その切れ目に別の花をとおします」。

わたしは、子どものなかにいる幸せをかみしめている。隣に座っている子は要領がわかって、静かに花をつないでいる。山のように集まった花々の周りに座り込み、レンゲ畑をなぞって渡ってくるやさしい風、ときおり吹く強い風がこちよい。お母さんも孫と一緒にの方も、黄、紫、白の花々を一本、一本手にとって、子どもだったころを思い出しお喋りがつづき、やさしい不思議な空間がひろがる。(黒崎啓)

4月21日、当日は風が少し強いものの快晴。

「レンゲ田をはじめとする“ふるさと景観”を残したい、子どもたちに昔のような自然の中での遊びを体験させたい」との願いから始めた「レンゲまつり」も7回目を迎えました。今年のレンゲは、今までになく見事に咲きそる好評でした。新聞や雑誌に大きく取り上げられ埼玉、八王子、世田谷など市外も含め実行委員宅に電話が殺到。市内レンゲ田情報を掲載した会のホームページへのアクセスも飛躍的に増大し、来場者は700名を超えました。その後も四谷のレンゲ田の写真が新聞にでて、レンゲの花に対する人々の関心の高さをあらためて実感させられ午後3時の閉会後もレンゲ田の雰囲気を家族で楽しむほほえましい姿が何組も見られました。

花だけでなく、それぞれのイベントも盛り上がっていました。今年は運営スタッフ、講師の方々合わせて50名を超える協力がありました。田んぼの提供、器材運搬、資材保管に加え、アドバイスもいただいた地元の戸塚勇さんに心からお礼を申し上げます。担当者からショートメッセージを寄せていただきました。(野口道夫)

紙芝居

レンゲ田のほぼ中央で紙芝居は始まりました。担当者の鳴り物で集められた30数人の子どもたちはレンゲの花に囲まれたシートに座り、はじめのうちはピンク色のキティちゃんボックスの鉛に「興味津々」でしたが、いざ紙芝居が始まると、キラキラしたつぶらなまなざしは画面に釘付け。画面が変わるたびに、「次は？ 次は？」という声が聞こえてきそうなくらい体、目、耳、心を集中させて聞いていました。

強風で読み手の声もかき消され気味でしたが、平成の幼児にも、生の声で読み聞かせる紙芝居の力は、まだ健在なのだど再認識できたことでもありました。(伊藤順理子)



レンゲ種まき器

レンゲの種は2~3mmで非常に小さく、手播きでは指の間からこぼれ落ち、均一に播種するのは難しい。そこで2リットルの四角いペットボトルの一面に100カ所の穴をあけて「種まき器」を発明。不揃いの種の形を考慮して穴径は4mmとした。また歩くスピード、腕を上げて種入りのペットボトルを左右に振る範囲と速さは、厚播き・薄播きに大きく関係するので実施前に試行し、量と区画も考慮して播種を行った。その結果、今年は見事なレンゲの開花に結びついた。(田上昌宣)



大きく開花

わらぞうり

年配者には昔懐かしい“わらのにおい”のなか、わらぞうりづくりを楽しみました。

老若男女の参加、学童クラブからも多くの参加があり初めて“わら”を使って作る“ぞうり”に興味津々。

先生の励ましの言葉を背に受けて一生懸命でした。や〜っとできあがった一つのぞうり。どのように履くのかな？

「これって、片足だよ！」と先生に言われて「???・・・xxx うーん、もう一つ作るの？」昔の人の根気・意思の強さを感じとったのかのようなひと時でした。(田上昌宣)



わら馬づくり

「あっ、わらのお馬だ」。椅子の上の見本のわら馬を見て女の子が云いました。「作ってみる?」。爺は、のんびりと誘いました。

「それじゃ、さいしょに耳と、顔をつくらう」。

こうして始めた、馬作りに、土曜日学童の子ども達もドットやってきました。「あたしもやる!」、「私も」、「足は、どうやって束ねるの?」、「しっぽがうまくいかないよ!」、「アッ、切れちゃった!」・・・あっという間に、そこは華やかな仕事場と化したのでした。そしてお昼もそこそこにこの忙しさとなりました。でも子ども達と一緒に、幾人ものお母さんや、お婆ちゃんもチャレンジ、大変嬉しいことでした。

来年は、作り方を、もう少し易しくアレンジしてみようと、爺は思いました。(花島弘通)



レンゲ田情報コーナー

今年、市内のレンゲ田はホームページに掲載した4カ所のほかに、市民の会会員が確認した5カ所ほどがありました。レンゲ田情報コーナーでは、これらを地図におとし、場所の写真も添えて掲示しました。「子どももの頃はレンゲ田でよく遊んだ。でも今ではほとんどなくなってしまって・・・」と懐かしそうに来場者は言います。レンゲを摘む子どもたちを見て、幼かった頃の事を思い出すのでしょうか。話が弾みます。お土産のレンゲの苗を買う姿も見られました。(梅沢みどり)



府中産蜂蜜

レンゲまつりで蜂蜜を売るのはレンゲとハチミツがぴったり結びつくこと、養蜂家矢島さんが府中におられて蜂蜜の実演販売ができるというメリットがあるからです。

今年も、府中産蜂蜜は、出品した100本を午前中に完売し、さらに実演採取した搾りたての30本も行列ができる人気で、希望者全員に行き渡らないという予想外の販売となりました。こんなに人気が出たのは、売り子の大沢さん、高橋さんたちの売り方のうまさによるものです。特に大沢さんは、集まったお母さん方に物腰柔らかく呼びかけ、ついに買う気にさせるスーパーテクニックの持ち主でした。(羽尻元彦)

野菜販売

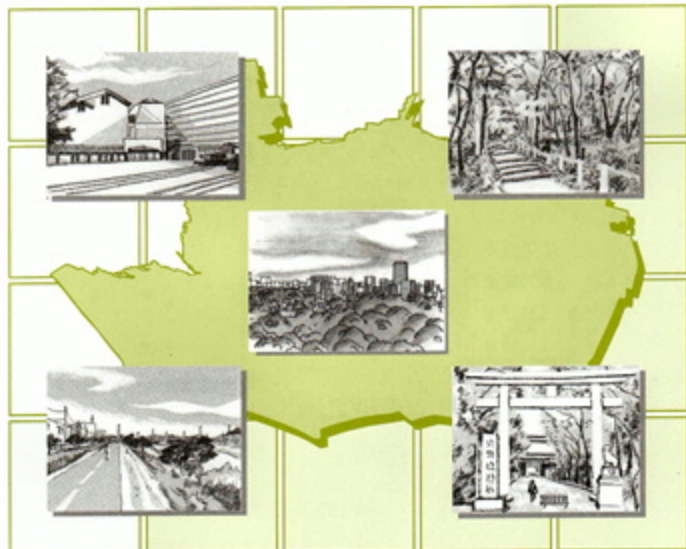
JA府中の関係者の協力で、まつり会場で新鮮な府中産の野菜を買ってもらおうと始めた企画でした。野菜販売はあくまで来場者へのサービスなので原価販売。それに持ち帰り用のレジ袋の経費負担もあり、売れば売れるほど赤字構造なので・・・といってもたいしたことはない・・・、人気は盛り上がり、毎年、午前中に売り切れてしまいます。レンゲ田はもちろん、野菜作りも府中の農業維持・発展にとって、大切なものなので、こうしたイベントは府中産野菜PRの一端を担っていると自覚します。(館浩道)

(撮影写真は徳谷寛子会員が撮影しました)

「地域まちづくり方針市民検討会」の 発足に寄せて…プランはまちづくりのスタート台

「地域まちづくり方針市民検討会」がスタートしました。初会合での高見澤講演「市民と行政の協働による地域のまちづくり」は、町田市で長年、まちづくりを実践された方だけに分かりやすく説得力がありました。

また「検討会を将来につなげてほしい」と問題提起がなされました。つまり、検討会が“地域別構想をまとめれば終わり”ではなく、そこから、まちづくりが始まるのだと主張された点は賛同できるものでした。その中心テーマは“協働”であり、市民同士や市役所・事業者がそれぞれの役割と緊張関係を持ちながら、まちづくりを推進すべきだといえます。



「府中都市計画マスタープラン」の地域別具体化が求められた

その意味で市民検討会は“協働の過程であり、まさに実験場”だろうと思います。そしてなによりも、まちづくりには継続性、専門性が要求されるとなれば、このような環境を創りながら、市民コミュニティをどのように形成するかが、行政のみならず、参加者に問われる課題でもあります。

これまでの経験を踏まえて、私なりにまちづくりへの思いや考えの一端を述べてみます。ご意見・ご批判をお寄せ下さい。

① 最近、ひらがなの「まちづくり」という言葉によく出会います。以前は「町づくり」「街づくり」が使われていました。「まちづくり」はハードのモノ作りだけでなく、地域の運営や自治のあり方、市民間の共同や活動をより良いものにする仕組みやコト起しなど、様々なソフト面を含むといわれています。まちづくりは多面的で、多様であり、その切り口は幅広いと認識し、これを念頭に論議を深めたいものです。



公園・緑地の整備方針の具体化も問われている…（「都市マス」より）

② 全体構想は過去に策定されたが、ここ数年、東京の社会・経済状況は大きく変化しているとの認識(高見澤講演)にたち、府中でも見直しや補完の議論の場は必要と思います。ブロック別の場でも意見表明できるよう、運営上、配慮されるべきでしょう。

③ ワークショップはよく採用される討議手法ですが、時間不足や討議が熟さないにも拘わらず成案づくりに向けて集約されがちな傾向があります。体裁を取り繕うことなく実効ある討議を心がけたいものです。

④ 都市マスタープランは基本的におおむね20年後の都市像(ビジョン)を想定することだと勉強会でも提起されました。ややもすると、目先の個別・具体的な実施計画を討議するという錯覚に陥りがちです。条例趣旨や個別計画との整合や役割などについて、市民が自主的に学習し、レベルアップをはかることも大事なことと思います。その際、市職員や専門家のサポートをぜひ、お願いしたいところです。

⑤ とかく計画は作れば、それで終わりだ…といったような傾向があったように思います。計画推進のため、PDCA(Plan-Do-Check-Action)システムを導入し、市民も参加する「仮称都市マス推進協議会」を設け、進捗把握、課題抽出や改善提案を行うなどが考えられます。

⑥ 「都市マスタープラン」と「緑の基本計画」はどちらも国土交通省の事業であり、基本的には緑の基本計画の成果を「都市マス」に反映するルールと聞きます。府中の場合、どうなるのでしょうか。(進藤礼治郎)

河原に咲く花の観察会

府中市委託事業の、「河原に咲く花の観察会」は、5月27日(日)、晴天の多摩川河川敷で行われました。参加者は、予想を上回る41名。

中河原公園で、農工大 星野義延先生に、河原の植物について、特に在来植物と外来植物を中心にお話しを聞いたあと一同は関戸橋から河原へ。観察区域は関戸橋から、少し下流の読売新聞下までの河川敷です。よく晴れた河原は、気持の良い川風がそよぎ、野鳥のセッカが、「チャッ、チャッ、ヒョッ、ヒョッ」と忙しく、小さな命で賑わっていました。



河原の草花解説のあとに付けられたカードは参加者にも好評だった。

河原に下り立った参加者が、先ず目にしたのは、国の絶滅危惧種、ミゾコウジュでした。枝先の花穂に、5ミリ足らずの淡い紫色の花(唇形花)が可憐です。しんがりを承った記録子が、付けられたカード「No. 1」を回収して、観察会は順調にスタート。No. 2「ムラサキツメクサ」、No. 3「シロツメクサ」、No. 4「イボタノキ」(これは木本)…。ナンバーと植物名の記されたカードを回収しながら、記録子は、最後部を歩きました。2分に一回位のペースで観察して行くうちに、参加者の列が段々と長くなってゆきます。「多摩川の河原に、こんなに色々な花があったんですね」「これ、キキョウソウって云うんですか、可愛いナ」、「アレチハナガサって、面白い名前」…。わいわいガヤガヤ楽しそう。でも、油断していると列は、更に長くなりそう。で…。しんがりは遠慮がちに、「もうちょっと急ぎましょうかネ」。

そして、列が長くなり、先生の説明が聞き取れない後ろの参加者から受けた質問に、知っている範囲での補足の説明をつけながら、回収するカードを探すのは、一段と忙しいものとなりました。(これは予想外、途中カードを見失うこと、遂に2~3回。)

そうしながら、途中15分位の小休止をとって、さらに観察を続け、やがて、絶滅危惧種のカワラサイコ(東京都Bランク)の黄色い花を目にすると、読売新聞下の高水敷は目の前です。この一帯は、レンリソウ(東京都Bランク)が多く見られる所で、参加者たちは思い思いの角度で、その紫色のマメ科の花をカメラに収めていました。観察会もいよいよ終わりに近づきました。

58種類の草花を観察

最後に、土手を上がる途中、ヤセウツボ(要注意外来生物)、ヘビイチゴの花を見て、約2時間の観察会の行程は、一人の落伍者も怪我人もなく、無事終了となりました。

最後のカードは「No. 58」。全部で58種類の植物を観てきたこととなります。終わりにあたり、スタッフの野口さんが、58種の植物名のおさらいをして、解散です。参加者が、満足して、三々五々帰路につくのを見届けて、スタッフ一同も、大満足でありました。

終ってみて、強く思うことは、当節、デジカメやケイタイで、手軽に写真が撮れるため、かなりの人達が、花をカメラに収めることに終始し、葉や茎に触ったり、花の香を確かめたりと、植物に直接触れることが少ないと云うことでした。身近な自然との交感の機会は、IT機器によって、無機的な映像に変換されて終るのでしょうか。考えさせられることでした。(椋島弘通)



草花を手にとりじっくりと観察する参加者も

4年目迎えた援農ボランティア活動



枝豆苗の植え付けに精を出す
柿本正夫さん

私が援農ボランティアを始めたきっかけは府中市社会福祉協議会主催の体験型ボランティア入門講座受講でした。初回は3月8日入門講座受講者4名とボランティアの方3名で、押立町の市村良知さん宅へ。素人の私に農業支援ができるのか不安でしたが最初の作業はカリフラワー収穫後の根の抜去でした。久しぶりに土の感触を楽しみながら力任せに抜去を開始。力仕事はそこそこ自信がりましたが数分すると息があがってきます。「根の向きを考えて抜くと楽に抜ける」そんなことを教わりながら、あっという間の2時間でした。市村さんご夫婦、先輩方々の魅力に引かれボランティアの継続を決意しました。

援農ボランティアの楽しみ

市村さんは大根、ホウレンソウ、レタス、トマト、枝豆、きゅうり等各種野菜を栽培しています。2回目以降はハウスの作業でした。昨年のトマトの抜去、ハウスのネット張り、トマト・枝豆の植付け、雑草取り、トマトの支柱・誘引とその都度新しい仕事を教えてもらいます。

最初の感動は完熟トマトのトマト本来の味でした。昨年のトマトが完熟して一部残っていたのですが、トマト茎抜去作業の途中で食べたその味は格別でした。次に驚いたのは成長の早さです。ハウス栽培の成長の早さは地物の2~3倍でしょうか。4月初めに植えたトマト苗は、可愛い丸い実をつけ、いつの間にか2倍近くに成長していました。たわわに実ったトマトの重みで誘引が外れそうになり、急遽、この補強も行いました。ほぼ2ヵ月たった今日(5月24日)、手がけたトマトを早速いただき、感無量でした。さらに予想外の楽しみは新鮮野菜のお土産です。その美味しさに家内と二人で舌鼓。期待してはいけないと思いつつ毎回楽しみにしています。私は援農ボランティアで農作業のノウハウを教わり、市民農園に再挑戦することになりました。(柿本正夫/南町在住)

白糸台でも地場野菜の直売

柿本さんの初々しい感想文にも示されているように、市民の会が府中の農業や農地を守る活動として援農を始めて4年目を迎えました。日曜日組と木曜日組が月2回、午前中2時間ずつ、3~4名でボランティアをしています。援農に関心のある方は是非、見学に来てください。

さて、白糸台文化センター近くのJAマインズに地場野菜の直売所がオープンしました。平日は9時から5時まで、土曜日は午前中に開店しています。売り場には近くの農家から毎日届けられる採れたて野菜が並んでいます。近くに行かれた時は1度お立ち寄りください。(梅沢みどり)

要求水準書準備段階ですんなり都庁内協議

PFI事業による国分寺崖線景観破壊問題

都が進める「多摩広域基幹病院」と「小児総合医療センター」新築事業は契約額2490億円の国内最大規模のPFI事業です。

問題は都が自ら策定した国分寺崖線景観基本軸の真上に基準の15mを無視して57.1mの超高層ビルを骨格とする「要求水準書」を決めたことです。

都は平成13年に国分寺崖線景観基本軸を指定しておきながら、病院経営本部作成の「要求水準書」の「遵守すべき法令一覧」に都景観条例・国分寺崖線景観基本軸を明記せずに決定。つまり、入札業者に景観保全義務を課さないという前代未聞の決定を都自らが行ったのです。私たちは、この間、住民説明会、意見書提出、公聴会陳述、現地見学会と景観シュミレーション検証、審議会傍聴や情報公開請求等を通して、見直しを要求してきました。

3月19日、市民の会は国分寺市民とともに府中市都市整備部関係者と面談し、都との協議経過や整備事業に対する東京都の姿勢について質したところ、見解を差し控えるということでした。

また、都市景観審議会の審議事項に該当するテーマでありながら報告だけで、「審議なし」は恣意的運用だとの指摘にも明解な答えはありません。

5月23日の都病院経営本部面談で、要求水準書作成段階の都市整備局との杜撰な協議や景観影響シュミレーションの恣意的設定等を指摘しました。

こうした問題を持つ建築計画は、容認できるものではありませんが、府中市土地利用調整審査会の答申“国分寺崖線に対する認識が不十分である”を都は真摯に受けとめるべきで、私たちは引き続き、景観行政の行方を注視していくつもりです。紙面の都合上、今後の課題をいくつか提起しておきます。⇒都庁内の横断協議の徹底化/都・市間協議のルール化/住民意見を反映する計画づくり(含PFI事業)/民間業者への開発規制/事前協議・是正勧告制度等の有効利用/武蔵国分寺の歴史・文化遺産景観/緑・自然環境資源保全。(崖線景観プロジェクト/2007.6.10)

産線・湧水保全と親水空間づくり

本格着手の条件整備整う

湧水を活用した親水空間づくりの第一歩として、3月に完成した西府ハケ下の土水路について、前号で報告しました。私は、歴史と文化・伝統をもつ水路や産線は府中のまちづくりの骨格であり、次世代に残す資源として再生・復活を願う立場から提言を行ってきました。ここでは最近の動向をまとめておきます。

(1) 疎水百選

2006年1月、農水省は農業用水路（疎水）が食料供給基盤であると同時に、美しい景観を形成する国民の共有資産であり次世代に継承すべきものとして「疎水百選」を選定しました。これには全国110カ所のうち東京都からは「府中用水」が選ばれました。

(2) 環境用水

同じく昨年3月、国交省河川局より「環境用水に係る水利使用許可の取り扱い」通達が出されました。これを受けて東京都農林水産部は7月の水利協議会で、詳細説明を行いました。環境用水の目的については「水質、親水空間、修景等生活環境又は自然環境の維持改善」と規定しています。水利使用申請の取扱い及び留意事項に関しては、市町村が申請者であること、またまちづくり計画として位置づける等の要件も明記しています。

(3) 府中用水モデル調査

本年2月、農水省は河川協議促進対策のモデル調査事業として「府中用水」を選び、調査を開始しています。東京都より入手した調査説明資料によれば、灌漑の受益面積が大幅に減少しているなかで、余剰水を環境用水として活用することが検討対象に盛り込まれています。報告者の作成に当たっては、都市計画、農業基本計画など、用水活用についての市の考えも重視するとしています。



農水省提言の「疎水百選」に選ばれた(2006.1.27)府中用水。通年湧水と親水化が待たれている



府中用水の親水化にむけて市民、研究機関なども積極的に関わりはじめた(2003年3月開催のシンポ)

(4) 水路・里道の利活用

分権推進法に基づき、平成14年には国から市に譲渡された水路・里道の法定外公共物は管理条例を制定したうえで、市の権限で利用・活用ができるようになりました。

(5) 親水路整備答申

以上のような行政サイドの条件整備が整うなか、府中市の関係部課職員からなる「親水路整備プロジェクトチーム」も発足し、平成14年には市長答申も行っています。答申では用水整備の重要性、水源確保、実施計画や市民参加の形態など、時宜に合う課題を提起しています。

(6) 水と緑のネットワーク拠点整備事業

水と緑のネットワーク拠点整備事業（市健康センター周辺）がスタートしましたが、市制50周年記念事業としての位置づけながら、市全体の緑と親水等の将来像づくりが背景にあります。

(7) 「市民のオアシス」づくり

西府産線の界隈は新駅の開業に伴い、開発圧力が強まるばかりです。西府産線・湧水（保全の緊急性あり）やホテルの里提案など、集水地域の特性を活かした「市民のオアシス」づくりに対する関心も高まっています。市内水路の最上流部の自然を生かして、それに連なる新田川は開渠も多く、親水化の条件が備わっています。

上述のとおり、国などの水、緑、景観などの取り組み環境は整ってきました。これらを踏まえて、現在、進行中の健康センター周辺の拠点整備と併せて、ハケと水路の景観ポイント…西府周辺の将来像づくりに着手することが期待されています。市民参加の仕組みなどの課題はありますが、地道な整備の積み上げと市民参加により将来像の具体化をはかりたいものです。（進藤礼治郎）



秋のヒガンバナが楽しみだ

ヒガンバナ救出作戦2年目の仕事…下堰緑地

四谷五丁目の下堰緑地で当会と地域住民が取り組んでいる「ヒガンバナ救出作戦」(2006年冬号および2006年夏号で取り組みの目的、現状などを報告しています)。今回は、その後の状況について報告します。

清掃とヒガンバナの植え替え

昨年度に引き続き4月7日に下堰緑地内の清掃を実施しました(地域住民3名および市民の会3名参加)。

続いて4月14日には、四谷の三屋通り東側、北道路の拡幅工事が完成したことを受け、この工事にともない保護のために仮移植してあった草木の復旧植栽を終えました(地域住民4名、市民の会5名参加)。作業はまず移植の前に清掃を行い…近隣の方からは、運搬用の一輪車・駐車場の提供を受けました。



植え替えたヒガンバナは緑地東側に50箇所(元用水地内と北道路工事跡)、および西側に45箇所(北側法面約20坪)です。これで、秋にはかなりの規模でヒガンバナの美しい展開が期待できます。

そのほかリュウノヒゲ、カンゾウ類なども植え替えました。また記念植樹として、西側に下堰緑地の実生どんぐり2本(西側)も行いました。



ヒガンバナの植え替えに精をだす人たち (2007/4/14)

今後の取り組み

今後、定期的な見回り清掃を月2回程度、日新学区まちづくりの会のみなさんと共同で実施します。

また昨年は6月から8月上旬にかけて、市の委託業者による除草(草刈)作業が実施され、多くの草花が生長過程で刈り取られてしまうという結果となりました。そのため開花が見られない草花もありました。このような状況を繰り返さないために、市の除草作業前に、日新学区まちづくりの会と当会で「除草外区」を設定し、行政に提案し了解を得ることができました。

具体的には昨年の草木の現状調査結果を参考に、6月1日から数回に分けて「除草外区」の設定を実施します。今後、多くの市民の方にこの作業に参加していただき、「自然な・親しみのもてる緑地公園」として市民が訪れることのできる緑地となることを願っています。

なお、9月中旬～10月上旬頃には「ガンバナ鑑賞」、「樹木観察会」を予定しています。(田上昌宣)

除草外区の設定

自生の草花の保護を目的に、保護すべき草花を30～40センチの目印テープで囲い、そこでは除草しないか、または最大限の注意を払って除草を実施するというもの…

この区域設定については状況を確認して地域住民の方と当会で実施する。保護する植物としては、カンゾウ類、ヤブラン、キツネノカミソリ、アマナ、カントウタンポポなど。